

# 鳥取県立博物館所蔵の銅剣に発見されたサメの線刻絵画について

平成28年2月9日・10日

鳥取県立公文書館県史編さん室  
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所  
鳥取県立博物館

## 1 発表要旨

- (1) 鳥取県立博物館が所蔵している弥生時代の銅剣にサメの線刻絵画が発見された（別紙1）。
- (2) 鑄造後の青銅器に絵画を線刻した例として、全国初の発見である。
- (3) 弥生時代のサメをモチーフにした絵画は山陰地方にしか存在せず、特に青谷上寺地遺跡で多くの類例があること、当該銅剣は「出雲型銅剣」とは型式が異なることから、弥生時代の鳥取県において極めて地域色の強い祭祀形態が存在していたことがうかがえる。

## 2 発見の経緯

- (1) 鳥取県は平成18年度から、新鳥取県史編さん事業を行っている<sup>※1</sup>。
- (2) その一環として、鳥取県関係の弥生時代青銅器について、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に調査研究を委託しており<sup>※2</sup>、その過程で絵画の存在が明らかとなった。
- (3) 当該銅剣は個人所有だったものが、平成2年度に鳥取県立博物館に寄贈されたものである。

※1 新鳥取県史編さん事業では「考古」、「古代中世」、「近世」、「近代」、「現代」、「民俗」の各分野で、主な資料を集めた『資料編』を作成する。

※2 調査研究では鳥取県関係の弥生時代青銅器17点（銅鐸12点、銅剣4点、銅矛1点）について、3次元計測、X線による鑄造状態等の調査、成分分析などを行っている。

## 3 サメの絵画について

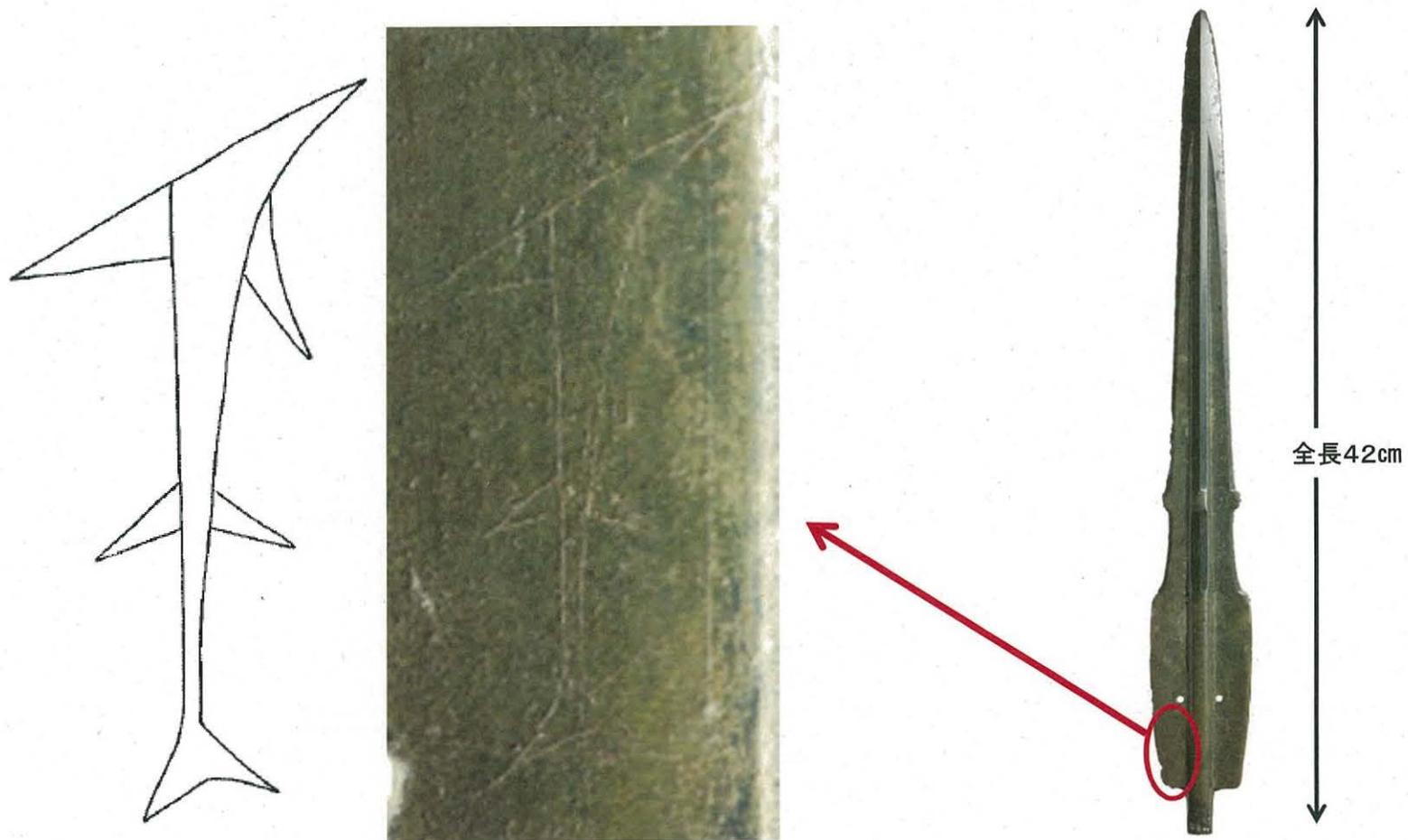
- (1) 鳥取県を中心として、島根県から兵庫県にいたる日本海沿岸地域には、弥生時代の考古資料に特徴的なサカナの線刻絵画が見つまっている（別紙2、3）。
- (2) これらは若干の表現の違いはあるものの、全体として次のような特徴がある。

- ①細長い流線形の形状
  - ②強調された第1背びれと、第2背びれ、腹びれの存在
  - ③尾びれの上葉を大きく、下葉を小さく表現
- (3) 現生魚類等でこうした特徴を備えるのはサメであり、上記の地域に特徴的なサカナの線刻絵画は、サメを表現したものと考えられる(別紙4)。
- (4) 今回発見された線刻絵画も同様な特徴を有し、サメと考えられる。
- (5) 今回の発見例を含めて、弥生時代のサメの線刻絵画は、鳥取県11例、島根県1例、兵庫県1例となり、特に青谷上寺地遺跡に9例と集中している。
- (6) 当該銅剣の特徴、絵画発見の歴史的意義については、別紙5のとおり。

#### 4 今回の発見成果の公表について

- (1) 2月11日(木・祝)から5月8日(日)まで、当該銅剣を鳥取県立博物館において特別展示公開する(その後は常設展示)。
- (2) 奈良文化財研究所との調査研究成果は、『考古資料編』に収録予定。

# 鳥取県立博物館所蔵銅剣のサメ線刻絵画



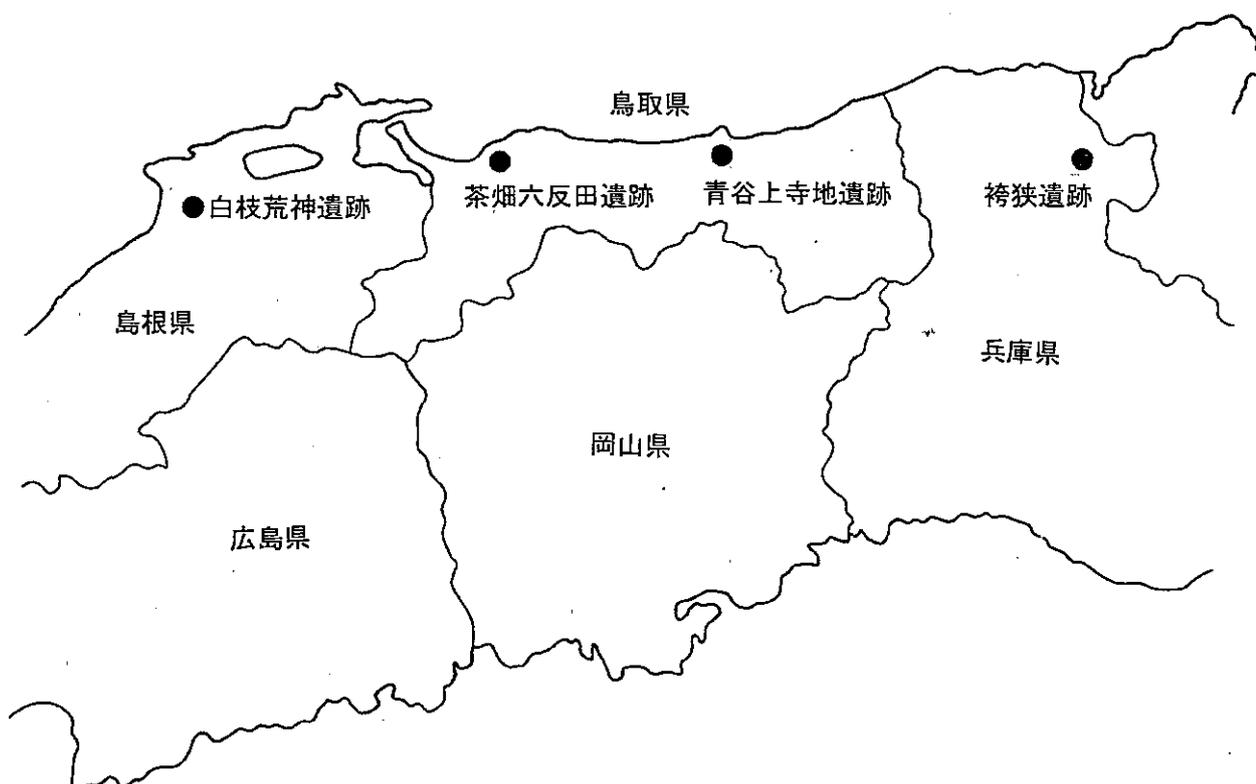
## 弥生時代のサメ線刻絵画資料一覧

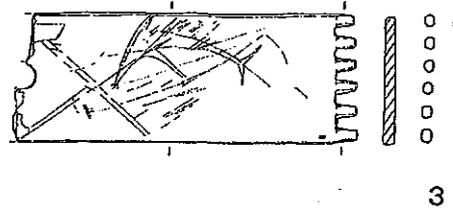
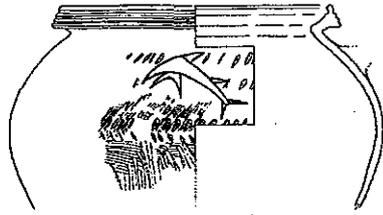
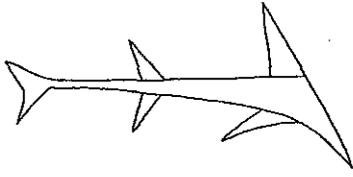
番号	遺跡名	所在地	種別	器種	サメの数	時期	出土年度	所蔵機関	文献	備考		
1			青銅器	銅剣	1	弥生時代中期後葉か		鳥取県立博物館	(1)	本発表資料		
2	あおやかみじち 青谷上寺地遺跡	鳥取県鳥取市青谷町	土器	壺か	1	弥生時代中期後葉	平成12年度	鳥取県埋蔵文化財センター	(2)			
3			木器	琴	1						平成11年度	
4				箱	7以上							
5				箱	6							
6			蓋	1	平成12年度		(2)		別に大型の魚？			
7			形代(魚形)	1	平成16年度	(5)						
8			不明(棒状)	3					不明		(4)	
9			櫂	5					弥生時代中期後葉			
10			石器	線刻硯	3	弥生時代前期末～中期	平成10年度		(6)			
11			ちやばたろくたんだ 茶畑六反田遺跡	鳥取県西伯郡大山町	石器	砥石	1		弥生時代中期後葉		平成15年度	鳥取県埋蔵文化財センター
12	しろえだこうじん 白枝荒神遺跡	島根県出雲市渡橋町	土器	壺	1	弥生時代中期中葉	平成5年度	出雲市教育委員会	(8)			
13	はかざ 袴狭遺跡	兵庫県豊岡市出石町	木器	打楽器	3	弥生時代後期か	平成5年度	兵庫県教育委員会	(9)			

## 文献

- (1)倉吉市 1973 『倉吉市史』  
(2)財団法人鳥取県教育文化財団 2002 『青谷上寺地遺跡4』  
(3)鳥取県埋蔵文化財センター 2005 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご』  
(4)茶谷満 2011 「資料紹介:青谷上寺地遺跡出土の線刻絵画木器について」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2010』  
(5)鳥取県埋蔵文化財センター 2006 『青谷上寺地遺跡8』  
(6)財団法人鳥取県教育文化財団 2001 『青谷上寺地遺跡3』  
(7)財団法人鳥取県教育文化財団 2004 『茶畑六反田遺跡(0・5区)』  
(8)出雲市教育委員会 1997 『白枝荒神遺跡』  
(9)兵庫県教育委員会 2000 『袴狭遺跡』

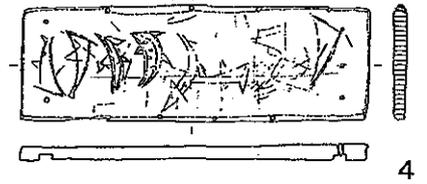
## 弥生時代のサメ線刻絵画資料出土地



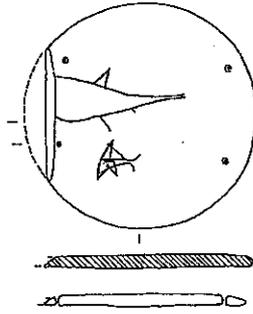
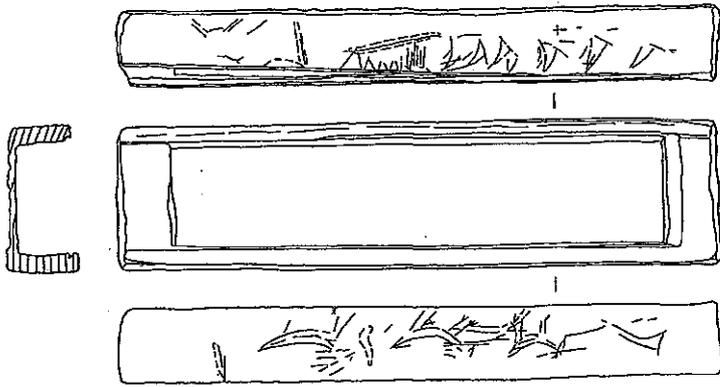


1 鳥取県立博物館所蔵銅剣  
(写真をトレース。約2倍)

2

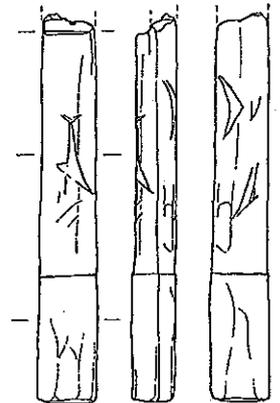


2~10 青谷上寺地遺跡 (鳥取県鳥取市青谷町)

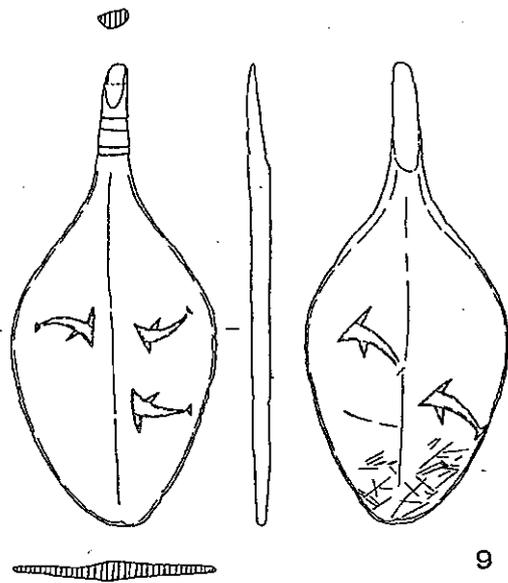


5

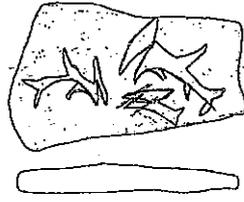
6



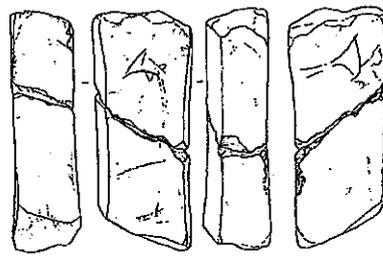
8



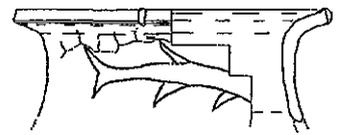
9



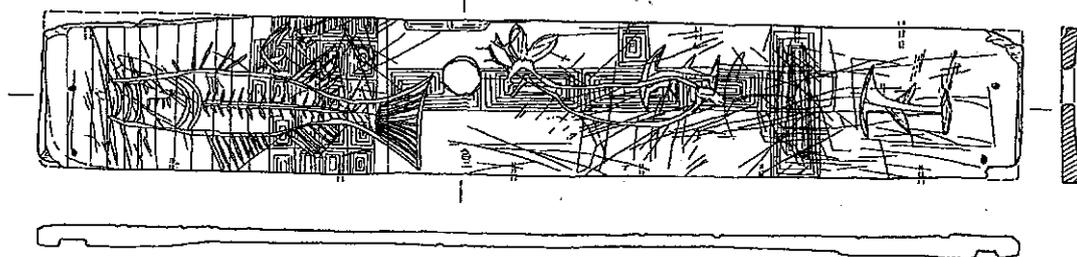
10



11 茶畑六反田遺跡 (鳥取県西伯郡大山町)



12 白枝荒神遺跡  
(鳥根県出雲市渡橋町)



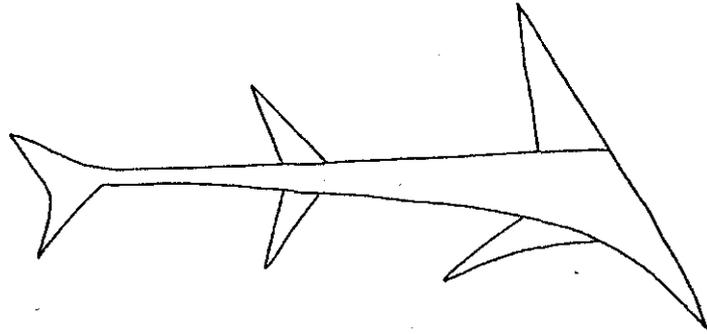
13 袴狭遺跡 (兵庫県豊岡市出石町)

2~7, 9, 11, 12... S=1/6

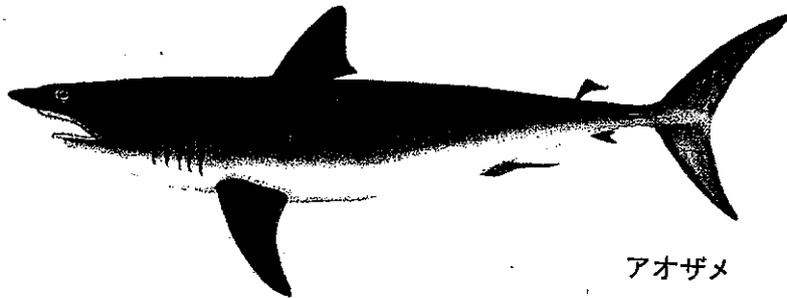
8... S=1/2

10, 13... S=1/4

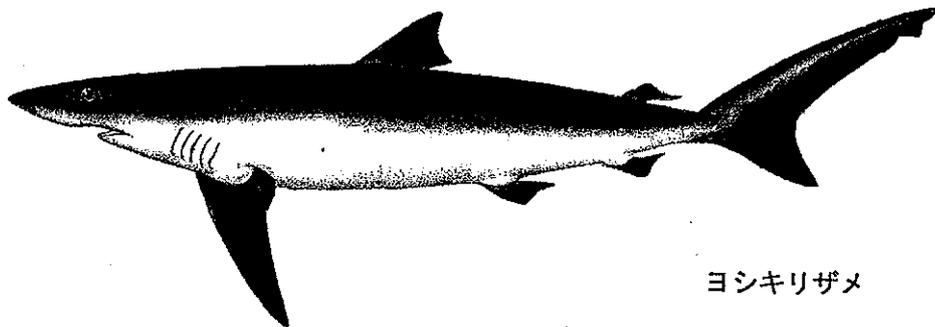
銅剣に描かれたサメとの比較



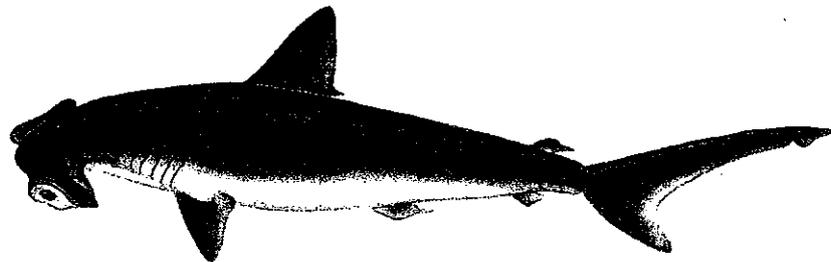
銅剣に描かれたサメ



アオザメ



ヨシキリザメ



シュモクザメ



マイルカ

【参考】流線形の海洋生物としてイルカもいるがイルカは背びれがひとつであること、腹びれがないことから、日本海沿岸地域に特徴的なサカナの絵画はサメと考えられる

## 鳥取県立博物館所蔵銅剣と線刻絵画の位置付け

2016. 2. 9・10 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長 難波洋三

## (1) 魚の線刻について

①所蔵品番号を茎に記載した面(A面)の元部の左半に、頭を鋒に向け腹を脊側にした魚を、極めて細い線で鑄造後に刻している。刻線は短線を繋いだものではなく、鋭利な工具で引き描きしている。

②第2背びれ、腹びれ(あるいは臀びれ)を描いているので、イルカではなく魚である。

③尾びれの上葉が大きく下葉が小さい特徴、第2背びれがある特徴、全体の形状などからみて、サメの可能性が高い。

④頭部と背びれの前の輪郭をひと筆で描く特徴、ひれを面として描く特徴、細長く屈曲した体部の表現などが鳥取市青谷上寺地遺跡などで発見されている魚の絵画と共通するが、魚の特徴をより正確に表現している。尾びれの上葉が大きく下葉が小さい特徴や第2背びれと対になるように腹びれ(あるいは臀びれ)を描く特徴は、島根県出雲市白枝荒神遺跡出土の土器の魚の絵に似る。

## (2) 銅剣の位置付け

全長42.0 cmなので、大きさからみると中細形銅剣b類にあたるが、刃方上端の突起は上下幅が7 mmほどあり、その先端を刻んで3分割するという特異な特徴を持っている。この刃方上端の突起を強調する特徴は、中広形銅剣、平形銅剣、銅剣を模した有樋式磨製石剣などにもみられるが、本例のようにその先端を刻んで3分割する例は、ほかに岡山県倉敷市瑜伽山3号銅剣しかない。

この刃方上端の突起に対応する位置の脊には、研磨痕や錆がない。脊の研磨痕や錆は刃の研磨に伴ってなされるので、刃方上端の突起が本来は通常の銅剣のような形状であったとすれば、脊のこの部位に研磨痕や錆が残っているはずである。よって、刃方上端の突起の先端を3分割する加工は、使用者が二次的にしたものではなく、製作者によるものであることがわかる。

本例は、大きさ、鋒が短い特徴、鑄造後に元部に双孔を穿つ特徴など、全体として出雲で多く出土する中細形銅剣c類よりも古い特徴を有し、製作時期が中細形銅剣c類よりやや古い可能性が高い。しかし、前記の刃方上端の突起の特徴からみて、中細形銅剣c類とはおそらく別系統に属するのであろう。

中細形銅剣b類はほとんどがこの銅剣と同様、朝鮮系の原料金属で作られているのに対し、中細形銅剣c類のほとんどは中国産の原料金属で作られている。本銅剣に実施したICP分析による成分分析によれば、錫濃度が14.63%と高く、またヒ素やアンチモンの濃度が低い。また、この成分分析の結果は、鉛同位体比分析の結果と整合しており、この銅剣は朝鮮系の原料を使って製作したと考えられる。以上の分析結果から、この銅剣の製作年代は、銅鐸では外縁付鈕1式末以前と併行する時期、具体的には弥生時代中期中葉(第Ⅲ様式)段階に遡る可能性が高い

製作地については鳥取県内の可能性もあるが、前記の瑜伽山3号銅剣との刃方上端の突起の特徴の共通性を重視すれば、瀬戸内で製作された可能性も検討する必要がある。また、①刃方の最も幅

の狭い部位が上端に近い位置にある、②刃方より上は元部に比して細身である、③元部の幅が比較的広くその上端すなわち刃方の下端が外に張りだして角張る、といった特徴は、香川県善通寺市瓦谷出土1号銅剣(全長50.2cm、中細形銅剣c類)や広島県尾道市大峰山1号銅剣(中細形銅剣b類)などと類似し、これも製作地を考えるうえで参考となるかもしれない。

同じ青銅製祭器であっても、武器形青銅製祭器(銅剣・銅矛・銅戈)は銅鐸とは異なって分析しうる属性が少なく、そのため工房レベルでの製品の抽出や細かな編年が遅れている。この銅剣についても、現状では製作地や製作年代について不明な点が多いと言わざるを得ない。一方、使用者が刻んだと思われるこの銅剣の魚(サメか)の線刻については、明らかに青谷上寺地遺跡を中心に島根東部から鳥取にかけての地域で集中的に出土する木製品・土器・石製品などに刻されている魚(サメか)の線刻と特徴が共通しているので、この銅剣は出土地不明であるがこの地域で使用され線刻がなされたと考えてよいであろう。荒神谷遺跡出土の358本をはじめ、島根県では中細形銅剣C類が多数出土しているが、このような線刻のある例は、まだ確認されていない。あえて言えば、兵庫県神戸市桜ヶ丘遺跡出土6号銅戈に矢のような線刻が铸造後になされているのを類例とできるかもしれない。

いずれにせよ、この銅剣は、銅剣の受容の仕方や取扱いに出雲とは異なる独自性が鳥取県域にはあったことを示す貴重な資料である。類似の魚を刻した木製品や土器の所属時期は中期末に限定できるようなので、この銅剣の線刻もこの頃になされたと考えられる。前記のようにこの銅剣の製作時期は弥生時代中期中葉に遡る可能性が高い。そうとすると、銅剣に魚の絵を刻したのは製作者ではなく、銅剣の入手後しばらくしてから使用者がしたことになる。

また、この銅剣の絵画は類例の中でもサメと思われる魚の特徴を的確にとらえており、略化が顕著でない。銅剣自体の保存状態が良好であること相まって、美術的価値の観点からも高く評価できる資料といえる。

本銅剣は、保存状態が良好なうえに出土後の伝世で生じた光沢もあったが、出土地や伝来が明確でなかったため、鳥取県立博物館ではこれまでほとんど展示に使用しなかった資料である。現在、奈良文化財研究所では、新しい鳥取県史の編纂事業に関係して鳥取県内出土青銅器の受託調査を実施しており、その過程で報告者がこの線刻を発見した。今後、弥生時代の祭祀の地域性や美術工芸などを語るうえで欠くことのできない資料となるであろう。